HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語の心的動詞をめぐって
Author(s)	最上, 英明; MOGAMI, Hideaki
Citation	独語独文学科研究年報, 15, 1-7
Issue Date	1989-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25777
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_P1-7.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ドイツ語の心的動詞をめぐって

最 上 英 明

0. はじめに

この小論では、人間の心理や感情や感覚などの状態を表現するドイツ語の心的動詞を考察の対象とする。心的動詞は統語論上も意味論上も動詞の重要な一分野を形成するものといえる。例えば Postal(1971) では、心理主語移動の変形で英語の心的動詞が統語論的に説明され、また Leisi(1952) では、riechen, schmecken などの動詞が嗅覚や味覚を表現する状態動詞として、意味論的にも特別な一群の動詞として扱われた。しかしこれまで、ドイツ語の心的動詞が包括的に取り上げられる機会はあまりなかったように思われる。そこでこの小論では、ドイツ語の代表的な心的動詞を取り上げ、統語的及び意味的な観点から、その特徴の一端を簡単に概観する。

1. 統語的側面から

まず心的動詞として取り上げるべき対象を考える上では、Postal(1971) での次のような分類が参考になると思われる。

(1) A. 知覚的述語 (perception predicate)

feel, lock, smell, sound, taste...

B. 心的述語 (psychological predicate)

amuse, bore, excite, frighten,irritate, surprise...

C. 感覚的述語 (sensation predicate)

ache, hurt, itch...

次に (1) に対応するドイツ語の動詞と例文を挙げる。

(2) A. erscheinen, klingen, riechen, schmecken...

B. begeistern, erregen, erstaunen, langweilen, überraschen...

C. betäuben, jucken, schmerzen, verletzen...

(3) a. Seine Eeklärung erscheint mir unglaubhaft.

b. Mir klingt der Muttername süß.

c. Mir schmeckt die Suppe.

(4) a. Diese Ski-Abfahrt hat mich begeistert.

b. Der Film langweilte ihn.

c. Deine Rückkerhr hat mich überrascht.

(5) a. Der Finger juckt mich/mir.

b. Mir/mich schmerzt der Kopf.

c. Mich/*mir schmerzt sein Anblick.

(2) で挙げた動詞を、ここではドイツ語の代表的な心的動詞と考えることにする。ただしドイツ語の場合、これらの例からもわかるように、目的語が3格か4格かという格の違いが問題となる。それから Lenerz(1977) でも指摘されているように、一般に心的動詞の特徴と言われるのは、心的な過程に関与する人間が主語でなくこの目的語の位置に立つこと、そして逆にその心的な過程に影響を与える事柄や事物が主語の位置に立つことである。その点で、何らかの事柄を表わす zu 不定詞句が主語の位置に立つこともあり、Eisenberg(1986) でも、zu 不定詞句を主語に取る心的動詞が、以下のように目的語の格の違いに応じて挙げられている。

(6) a. Viel zu reden widerstrebt ihr.

b. gefallen, fehlen, imponieren, wehtun, behagen, bekommen, einfallen, liegen, glücken, genügen, schwerfallen, zustehen

(7) a. Nichts zu verstehen ärgert mich.

b. begeistern, freuen, entrüsten, entwaffnen, erschrecken, erzürnen, ermutigen, knechten, beeindrucken, erheitern, quälen, belasten

これらの動詞も、主語の不定詞句により表現されるある種の事柄が、3格または4格目的語の人間の心的状態に影響を与えるという点で、心的動詞と考えられる。

さて次に、この目的語が3格か4格かという格の違いについて検討する。まず (2) での分類に基づいてみてみると、Aタイプの schmecken などの知覚的な動詞は3格目的語しか取らないのに対して、Bタイプの überraschen などの心理的な動詞は4格目的語しか取らないことが指摘できる。それからCタイプの感覚的な動詞では、verletzen などのように4格目的語しか取らないものもある一方で、jucken, schmerzen などは (5) での例のように、3格と4格の目的語を両方とも取ることがわかる。さらに同じ動詞でも (5b) でのような直接的な感覚 (ここでは身体的な痛み) の場合は、3格も4格も取りうるのに対し (ただし、3格の方が一般的らしい)、(5c) でのような心理的な感情の場合は、4格しか取れない点も注目される。これは辞書での次のような2つの意味の記載に対応するものである。

(8) a. körperlich weh tun

b. seelisch weh tun

[DUDEN: Deutsches Universalwörterbuch(1983)]

こうしたことから、心的動詞には、3格目的語を取るとより直接的な知覚や感覚を表現し、4格目的語を取ると感覚よりむしろ心理的で内面的な感情を表現する傾向をもつものもあるといえる。

なお、このような感覚的な動詞での3格目的語は、Pertinenzdativとも関連してくる点が興味深い。以下はDuden-Grammatik(1984)からの例である。

(9) a. Dem Kind blutet die Hand.

b. Dem Mann schmerzt das Bein.

c. Ihr tränen die Augen.

d. Ihr friert die Nase.

e. Dem Bauern verendet das Vieh.

もちろん、(9e)のように明らかに心的動詞とはいえないものもあるが、身体的な感覚を表現するshmerzen, frierenなどの心的動詞でのPertinenzdativとの関係は明白である。これについては、次章の最後でも少し触れる。

以上この章では、ドイツ語の心的動詞を分析してみると、その心的過程に関与する人間が3格目的語と4格目的語のどちらで表現されるのかという統語上での大きな違いがあること、主語に不定詞句も立ちうること、また3格を取る場合はPertinenzdativと関わる部分もあることなどを指摘した。

2. 意味的側面から

次にこの章では、3格目的語を取る心的動詞について、さらに何らかの意味上の特性を探ってみる。4格目的語を取る心的動詞では、主語と目的語は使役的な他動詞の関係というごく一般的な文法関係が成り立つが、3格目的語の場合は、意味的にも微妙な側面を持つと思われるからである。3格目的語に人間の心的な状態の表現と密接に結びつく傾向があることは、(10)のように主格がなく、3格目的語だけの表現が多く存在することからもわかる(もちろん主格の必要な環境では、esが立つ)。また(10b)は動詞ではなく形容詞の例であるが、このような形容詞が3格目的語と一緒に用いられる点からみても、人間の心理的状態の表現と3格目的語との密接な関係が示唆されるように思われる。

(10) a. Mir schwindelt/graut/graust.

b. Mir ist angst/übel/wohl/schlecht.

さてWegener(1985)では、3格目的語を取り人間の心的状態を表現する動詞と形容詞が取り上げられている。彼女の場合、興味深いことに、3格目的語を取るこれらの述語の例と一緒に、この3格目的語が1格に置き換えられた表現と対比して示されている。

(11) a. Mir schmeckt die Suppe.
b. Ich mag die Suppe.
(12) a. Mir gefällt der Film.
b. Ich mag den Film.
(13) a. Mir imponiert,was er sagt.
b. Ich achte, was er sagt.
(14) a. Mir ist heiß.
b. Ich schwitze.
(15) a. Mir ist kalt.
b. Ich friere.

Wegener自身は、強さ(Intensität)の違いという概念で、それぞれのa.とb.文の意味の違いを説明している。例えば(14)と(15)の場合、それぞれ次のc.のような表現が可能なことから、a.の3格での表現よりもb.の1格での表現の方が、より強い主体的な意味を含意すると考えられている。

(14) c. Mir ist heiß, aber ich schwitze nicht.
(15) c. Mir ist kalt, aber ich friere nicht.

他の例についても、b.の文の方が、より主体的なニュアンスが強い表現と考えることができよう。例えば(11)や(12)でも、a.の方は、たまたま現時点で飲んだり見たりしているスープや映画に対しての心的な反応であり、b.の方は、それらの対象に対して、一時的ではなくより持続的で習慣的な好みを表現している。

次にここで、3格目的語を取る心的動詞の意味的な特徴を、まとめて整理してみる。まず今も述べたように、(11)~(15)でのa.の人間が3格の表現が、特定の状況化での一時的なその場限りの心的状態を表わすのに対して、b.の1格の表現は、より一般的で習慣的な心的状態を表わしている。それから(11)も(12)もa.の文で主語となっている対象がどちらも定冠詞のついた名詞句であること、つまり定性をもっている点も注目される。これは人間が心的反応を示しうるには既知の対象に限られるという人間の一般的な認知構造に基づくものともいえる。例えば、次のような表現は不可能だからである。

(11) c. *Mir schmeckt eine Suppe.

(12) c. *Mir gefällt ein Film.

さらに、3格目的語を取る心的動詞の表現には、主観的な感情が強く表現されているという意味的特徴も認められる。

(16) In dieser Zeit gefiel mir mein Mann am besten.

(17) Sein Name Tarogatos klang mir geheimnisvoll und vornehm.

(18) a. Die Musik klingt mir laut.

b. Die Musik ist(klingt) laut.

c. Dies ist meine Auffassung.

(11) から (15) までの例でも、a. の文の3格目的語による表現には、「他の人間にとってはどうであっても、私にとってはこうなのだ」という主観的な心的感情の強さが感じられるが、(16) と (17) の小説及び評論からの例文も同様で、「自分にとってはこうなのだ」という主観的な心象の表現だといえる。この点については、Koch(1979) での、(18a) の心的動詞による表現が、(18b) と (18c) の2つの命題に分解できるという指摘からも裏付けられる。ここでいう主観的意味合いとは、(18c) の命題に対応するものといえるからである。さらにまた、このように3格目的語が「私にとっては」とか「自分にとっては」というような主観的な意味を強く持つことから、意味論のレベルでは、この3格目的語は心的現象の生起する場所 (もちろん心的反応を示す人間) を表わすものと考えることもできるように思う。いわば場所格 (Lokativ) のような役割である。こうしてみてくると、前章の最後に触れた (19) のような文での3格目的語の Pertinenzdativ は、あるいは一種の場所的な表現ともいえるのではなかろうかという観点からの分析も可能であるように思われる。

(19) Mir schmerzt der Kopf.

以上この章では、心的動詞の中でも特に人間の心的表現と関係の深い3格目的語と結びつく場合について、意味的な観点から検討してきた。そして、この心的動詞では、何らかの一時的な場合において、ある特定の対象から受けた主観的な感情を表現する傾向が見られるのではなかろうかという分析を、いくつかの事例を通して述べた。

3. まとめ

この小論では、ドイツ語の代表的な心的動詞を取り上げ、その主な特性を統語的及び意味的な観点から概観してきた。何らかの心的過程に関与する人間が主語でなく目的語の位置に立つ動詞を心的動詞と考えると、その目的語が4格の場合は、他動詞としての一般的な使役的関係を示し、それが3格の場合は、もともとドイツ語では人間の心的状態の表現と密接な関係にあるだけに、一時的で主観的な心的状態の表現という性格がみられるのではなかろうかという、意味的な側面にも触れた。今後は、これらの論点を、さらに数多くの実例を通して深めていくこと、Pertinenzdativ との関連をさらに考察することなどが課題である。

Literaturverzeichnis

Eisenberg,P. 1986. Grundriß der deutschen Grammatik. Stuttgart.

Koch,W. 1979. Zur Semantik der psychologischen Verben. In: Pettesrson,T. (ed.) Papers from the 5th Scandinavian Conference of Linguistics. Stockholm.

Leisi,E. 1975(1952). Der Wortinhalt. Heidelberg.

Lenerz,J. 1977. Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen. Tübingen.

Postal,P.M. 1971. Cross-Over Phenomena. New York.

Wegener,F. 1985. Der Dativ im heutigen Deutschen. Tübingen.

（大学院博士課程）